

コラム2

「映え」より連絡ツール？ 「つながる相手の選び方」のいまむかし



中央大学文学部社会情報学専攻教授 松田美佐

「インスタのアカウント、教えて」

4年ぶりのゼミコンパで学生同士が打ち解けてきた頃、一人がこう言い出したのをきっかけに、アカウントの交換大会が始まった。

日常的なゼミの連絡は、LINEグループで行っている。なので、学生同士、お互いのLINEアカウントはわかるはず。なのに、なぜ、インスタのアカウント交換？ 頭の中は疑問符でいっぱいになる。とはいえ、私はメディア研究者。「アカウントのQRコードってこれだよ」とそばの学生に見せると、「あ、先生のアカウント！」すると、「私も」「私も」と何人かを読み込んでくれる。「教員がフォローしてもいいのね」と思う私。交換大会終了後、LINEとインスタの使い方について尋ねてみた。

「まずはインスタのアカウント交換、LINEは親しくなってから」

「LINEはお母さん（笑）連絡手段かな」

「インスタはDM用、投稿はしない。たまにストーリー」などなど。

確かに、つながった学生のインスタの投稿はゼロだったり、1桁だったり。教員とも交換できるアカウ

ントだからかもしれないが、「インスタ映え」の投稿はほとんど見られない。基本、連絡用のアカウントなのだ。

それで、思い出したのが、1990年代後半の「番通選択」である。

個人所有のケータイが若者たちに普及し始めた頃、調査していて驚いたことの1つが、初対面で電話番号を交換することであった。とりあえず、電話番号を交換しておき、電話がかかってきたところで、表示される登録名を見て、電話に出るかどうかを決める。家の電話より早く、標準装備となったケータイの発信者番号表示サービスを活用した「つながる相手の選び方」だったのだ。

その頃、プライバシー意識の高まりで各種の名簿が作られなくなる一方で、若者たちは初対面の相手と気軽に電話番号を交換するようになっていた。矛盾するようだが、つながる相手を自分がコントロールするという意味では共通している。同じ学校や職場というだけの相手に電話番号は知られたくないが、電話番号を交換する機会が生じた相手には教えてもかまわない。ケータイは居住地と紐づいていないので、間口は広く

あけておき、かかってきたところで、応答するかどうかを個人が状況に応じて選んだのである。

さて、現在。「おばあちゃんともLINE」と話す学生がいるように、あらゆる世代がLINEでつながっている。だからこそ、必要な連絡はLINEで管理する一方、同世代との日常的で緩いつながりはインスタのDMと使い分けるのだ。インスタなら、初対面の相手に共通の知人がいることがわかったり、特にやりとりしなくても、たまに流れるストーリーで人となりを知ることでもできたりする。

これは私のゼミ生特有の使い方かもしれない。しかし、SNSに投稿しない人が若年層でも3割から半数ほどとのデータもあるように、発信はせず、閲覧やDMだけの利用者は少なくない。インスタのDM活用は、今どきの「番通選択」——メディアを活用した「つながる相手の選び方」なのではないか。

「インスタ映え」だけではない、SNS利用の一側面を発見した4年ぶりのゼミコンパ。偶然の発見がある対面での集いの重要性を感じた時間であった。